

新作玩具体験会 ―カントボーイパロー
サンプル

将来のこと

「じゃあ、行ってきます。慶人くんも気を付けて行くんだよ」

「ありがとうございます。行つてらっしゃい。無理しないで」

「ありがとう」

玄関でのお見送り。宗形はこのところ忙しいようで、慶人よりも一時間以上早く家を出ていた。音を失ったリビングに戻り、ソファの上で膝を抱える。しかし、その直後にハッとしてキッチンに立った。

朝食は宗形と食べたし、食後のお茶に使ったカップも洗ってある。キッチンに用はないが、部屋のほとんどすべてにカメラが設置されているのだ。思い悩む姿をさらすわけにはいかない。

飲みたいわけでもない水を蛇口からグラスに注ぎながら、心の中ではあ……と深いため息を吐く。大学三年の秋。いい加減、真剣に進路を考えねばならなかった。出遅れていることはわかっていた。周りとはとくに就職活動を始めている。

(ほんと、どうしよう……)

宗形には就職せず家にいてほしい、親には宗形の会社で働いていることにすればいい、と言ってもらっていた。

しかし、その言葉に甘えていいとは思っていなかった。

(就職……でも業種とかなあ……)

アルバイトの経験は、宗形と知り合った性風俗だけだ。それだって慶人が知らないうちに社長である宗形に甘やかしてもらっていたのだから、社会人としてあるべき姿勢だって身についていない。

(大学まで行かせてもらったんだから、何か……)

親に堂々と言える業種に進まなければ。しかし、特別やりたいことがあるわけではなかったし、何より宗形を見ていると自信を失う。

年齢は倍ほど違う。当然経験値だって違う。しかし、すぐ近くでできる男——できすぎる男を見ていると、ただただ卑屈な思いを抱えてしまう。

(かっこよすぎるんだよなあ……)

外見はもちろん、性格だっていい。大人としての余裕があつて心も広い。喧嘩にだってならないどころか、慶人のわがままはすべてかわいいと認識されているようだ——。

(もし女だったら永久就職だって……)

いや、自分の劣等感をそんなふうに考えるのはずるい。こらえきれずにため息を吐いた瞬間、ツ

キンと刺すような痛みが下腹部に走った。

「痛ッ……」

咄嗟に腹を抱えて床に膝をつく。しかし、もう痛みはひいていた。勝手に膝が折れるほどの痛みだったのに、一瞬だけだった。しかし動けばまた痛みが走るかも、としばらくそのまましていると、自宅の電話が鳴った。慶人がいるところから二メートルの距離。おそらく宗形だろう。

痛みに襲われないか、おずおずと床に足の裏をつける。どうやら大丈夫そうだったので電話の子機を取った。

想像どおり、宗形の名前が表示されていた。

「もしも――」

『どうした？ 何があった？』

端的な、焦りを含んだ声。

『怪我をした？』

その言葉に、そうか、と気付く。今は運転中だからカメラの映像は見えていないのだ。痛みに襲われたときの声で何かあったと察してくれたのだろう。

「いえ、なんか急にお腹に痛みが……でも一瞬でしたから、大丈夫です」

『すぐ戻る。病院に行こう』

「いえ！ 大丈夫ですよ。本当に一瞬だったので、筋肉がびくってなったのかも」

自分と宗形を比較して卑屈になっていたというのに、それでもこうして声を聞き、心配してもら

えているのだと思うと嬉しくなる。

『でも――』

「本当に大丈夫です」

それでもまだ心配だと言う宗形に、また痛くなったら相談すると言って電話を切る。

(……へへ)

優しい。嬉しい。心配をかけたことは申し訳ないけれど、それでも好きな人に大切にされて不快になるはずがない。

それに、こうして立って話していても痛まなかった。やはり、体の内部で一瞬何かが起きただけだったのだ。

「なんかちよつと元気ない？　大丈夫？」

講義の後、声を掛けてきたのは隣に座っていた友達の春太^{はるた}だった。人見知りだという彼はおとなしいタイプだけれど、人の顔色をよく見ていた。

「ううん、大丈夫。ありがと」

「それならいいんだけど……」

こんな会話も、耳につけられた收音マイクですべて宗形に聞かれている。

「むしろ春太くんの方が元気くない？　悩みごと？」

「えっ……あ……その、就職のこととか」

「ああ……いろいろ考えちゃうよね」

（今、会議中だったらいいけど……）

しかし、そんなタイミングよく事は進まないだろう。ポケットの中で、メールの受信を告げる短い振動を感じる。

普段は宗形の「慶人くんのこと何だろうと知っていたい」という独占欲や支配欲が嬉しいけれど、こういうときは少し困ってしまう。慶人の気持ちを知られるだけでなく、たとえば誰かが内緒話を持ち掛けてくれたときも会話が筒抜けになってしまうのだ。宗形の性格上、おそらくそのときくらいは察してイヤホンをオフにしてくれていると信じているけれど。

「ねえ、春太くん、ちょっと痩せたんじゃない？大丈夫？」

慶人が続けると、春太は口をつぐんだまま視線を落とした。明らかに大丈夫ではない。

「次、講義入ってたっけ？ 少しお茶しようか」

慶人の誘いに、春太は静かに頷いた。

二人で連れ立って構内のカフェに入る。ほとんどの飲み物が一杯百円。春太も甘党で、ココアのカップに口をつけた。

「慶人くんは就職先、決めた？ その、受けるところっていうか」

首を振るだけにしてしまおうかと思ったが、宗形が聞いていたら不審がられる。言葉にすれば知られてしまうが、やはりイヤホンのオフを願うし

かない。

「……うん、まだ」

春太は慶人の返事にほっとした様子で息を吐いた。

「よかった。つて言っているのかわからないけど、仲間がいるって思っちゃった」

「僕もだよ。春太くんは、場所は？ この近くで就職？ それとも実家の方に帰るの？」

職種から話をそらすための質問だったが、春太の顔色が暗くなったのがわかった。どうやら深刻なところを突いてしまったらしい。答えなくて済むよう、慌てて言葉を添える。

「僕はさ、この辺に残るんだ。引越はしたくなくて。今住んでるところから通えるところにするつもり」

「あ、そうなんだ。僕も」

「じゃあ、卒業しても会えるね」

「うん」

言葉は少ないが、春太とは無言でいても気まずさは感じない。

しばらく静かにココアを飲んでいると、再び携帯が震えた。春太に断って画面をつける。

宗形から、二通のメッセージが届いていた。一通は先ほどの『やっぱりお腹が痛い？』という慶人の体調を案じるもので、今届いたのは『しばらくイヤホンを外しておくよ』というものだった。

宗形の氣遣いに胸が温かくなると同時に、口の動きが滑らかになる。

「ここから通えるところって言っても、たくさんあるもんね」

突然話しだした慶人に、春太が驚いた様子で顔を上げた。

「あ、うん……」

「業種だっているいろいろあるし、たとえば一言で接客って言っても山のように店はあるしさ」

「そうだよな。慶人くんは接客したいの？」

「うーん……嫌いじゃないと思うんだけど……」

しかし不特定多数の人と会う仕事を選んだら、宗形はどう思うだろうか。もし宗形が接客業だったら、きっと慶人は毎日が不安でたまらない。

「人当たりもいいし、慶人くんには合ってそうない気もするけど」

「そうかな？ でも、いいんだ。やっぱり無難に事務系かなあって思ってるけど、簿記とかも持っていないし、微妙かなあって」

「僕も事務とか……できれば人と話さない仕事がいいんだけど」

「人見知りだもんね」

「うん……もし知識や技術があったら在宅で働きたいくらい」

「フリーランスとか？ 自営業って言うのかな？ よくわからないけど、そういうの？」

「うん……でも何もできないし、そういうのも結局経験がないと無理だろうから……」

春太が俯き、自然と会話が止まった。

（そうだなあ……）

在宅での仕事は、慶人も考えたことがあった。

宗形は忙しい。慶人が家で働けば、今と変わらずおかえりなさいと出迎えることができる。

「春太くん、絵とか描けないの？」

「無理。文章も書けないよ……」

「そっか……」

「それにフリーランスだと、結局自分で営業したりしないといけないみたいだから……」

春太は本当に殻にこもってしまいたいようだった。もし選べるのなら、アサリになりたいとでも言い出しそうだ。

「まあ、今って昔と違って転職もしやすいしさ、近くに残るならたまに愚痴大会とか開けるし」

言いながら、何の慰めにもならないことを感じていた。しかし春太はかわいらしい笑顔を作ると「ありがと」と言って、次の講義に向かった。

（僕もちゃんと考えないとなあ……）

それとも本当に、宗形の家に――。

それはやはり、永久就職というものだろう。しかしもしそうして家にいて、万が一宗形と別れることになったら――。

大卒で無職、アルバイト経験もほぼなしなんて、

どこも雇ってはくれないだろう。

宗形への愛情が冷めることはないと思っている。しかし宗形はあんなにいい男なのだ。どうしたって周りが放っておかない。それに会社だっていつかは跡継ぎが必要になるだろうし、年齢を考えたら親に孫の顔をなんて話も出るかもしれない。

別れ――考えるだけで胸が苦しくなる。

もし宗形が結婚をすることになったとき、恋人としての立場は残すとか、結婚が形だけだ、紙切れだけだと言われたとしても、耐えられるはずがない。

（やっぱり就職……）

でも、就職したら宗形といられる時間は減ってしまう。週末だって疲れて寝るだけになってしまいかもしれない。宗形は自分の仕事に慣れているが、慶人は一から覚えていくのだ。慣れるまでは疲労だって普通では済まないだろうし、忙しい会社だったら残業や休日出勤ですれ違いが生じてしまいかもしれない。それにもし、転勤になんてなったら――。

（僕が家にいたら……そしたら……）

別に、「女は家で男は外」なんて考えをしているつもりはない。専業主夫だって立派な仕事だと思う。しかしいつかそうなるにしても、職歴のひとつくらいはきつと必要――。

考えても考えても、ぐるぐると頭の中がめまい

のように揺れ動いて疲れるばかり。しかし逃げられる内容のものではない。

もし自分が女だったら、宗形と結婚して家庭を作ることができたかもしれないのに。子どもだってできたかもしれない、そうしたらそう簡単には離婚なんてことにはならなくて――。

でも現実には男同士だ。子どもどころか、今の政治家は結婚することすら許してくれない。同性同士で結婚したって誰かに迷惑をかけるわけじゃないのに――そう思ったとき、今朝よりも強く、鋭い痛みが腹に走った。

椅子に座っていたことは幸いだった。倒れ込むことなく、その場で腹を抱えて丸くなる。

(長いっ……)

今朝はすぐに治まったのに。

血の気が引くような強い痛みだった。歯を食いしばって耐える。

しばらくすると、少しずつ痛みが引き始めた。

それでも氣を引き締めたままゆっくりと体から力を抜く。

最後まで脱力すると、ふう……と安堵の息が漏れた。

(なんなんだろ……)

突然下腹部に走る強い痛み。普通の腹痛とは違うので怖い、筋肉がつったのではと思うとそのような氣もする。

幸い今回の痛みは宗形には知られていない。しかし隠し事はしたくなかった。

携帯を取り出し、また腹が痛くなったこと、しかしもう痛みは引いたこと、念のため今日はもう家に帰ることをメールで入れておく。

鞆を持って席を立った瞬間に、携帯が震えた。

「もしもし」

『迎えに行くよ。そのまま待っていて』

「え、いえ、大丈夫ですよ。もう本当に痛くないんです。今は何でもないっていうか、普通に元気なので」

しかし、絶対に迎えに行くという宗形の圧力に負け、慶人は再び椅子に腰を下ろした。

「熱はないね」

「あの、すみません、本当に大丈夫なんです」

家に着くと、冷えたらよくないと珍しくパジャマを着せられ、そのままベッドに入れられた。体温計を確認した宗形は、それでも心配そうな表情を崩さない。

「医者を呼ぼうか」

「いえ！ お医者さんも何で呼ばれたんだってびっくりしちやいますよ」

帰りの車内、宗形は病院に行くと言って聞かなかった。しかし大丈夫という言葉を一生分使ったのではと思うほど慶人が主張して、なんとか帰宅

の途についたのだ。

「それより仕事中だったのにすみません。大丈夫なので戻ってください」

「ダメだよ。一人になんてできない。一応急ぎの仕事は持ち帰ってきたが、慶人くんは何も心配はいらないよ」

そう言って慶人の頭頂部を撫でる宗形の手はひどく優しい。

「少しおやすみ」

「はい……」

額に降ってくるキス。目を閉じると、まぶたや鼻先にもキスが繰り返し贈られる。

「総一郎さん……」

「ん？」

「お迎え、ありがとう」

心配をかけたことは申し訳なかったけれど、嬉しい。そんな気持ちを込めて言うと、宗形は「当たり前だ」とどこか怒ったように言って、目を細めた。

どうやら、本当に眠っていたらしい。眠くはなかったはずなのに――。

隣に宗形の姿はなかった。おそらく書斎で仕事をしているのだろう。

迷惑をかけた謝罪をしに行こうと体を起こしたとき、寝室のドアが開いた。宗形が静かに入って

くる。

「総一郎さん」

「ああ、目が覚めたか。体調はどうかね」

「なんていうか、いつもどおりです。寝不足だったわけでもないのに爆睡しちゃいました」

「疲れが溜まってたんだよ」

宗形がベッドに腰かけた。大丈夫だと言っているのに、そっと慶人の額に手をあてる。

「熱はないね」

「本当に元気なんです」

「それならよかったけど……お腹の痛み以外に体調におかしいところはないかな」

「大丈夫です」

はつきりと答えると、宗形の表情が緩んだ。

「しばらく家事はしてくれなくていいからね。食事は宅配のものを申し込んでおいた。風邪のひき始めかもしれないから、家の中でも服を着ていて」

「ごめんなさい」

「謝ることじゃないだろう。お粥を用意したよ。」

「食欲はどうかね」

「食べたいです」

「持ってくるよ」

「いえ、ダイニングに行きます」

ベッドから下りようとすると、過保護にも腰を抱くように支えられた。

「へへ」

「普段からもっと甘えてほしいんだけどね」

「じゅうぶん甘えてます」

本音だったのに、宗形はどこか寂しそうにほほ笑んだ。

「総一郎さん？」

「ほんの少しの体調不良でも、些細な悩みでも愚痴でも話してほしいな」

もしかしたら、慶人が進路のことで悩んでいることに気付いているのかもしれない。

（でももう少しだけ……）

今はまだ、もう少し一人で考えたい。

「さあ、ご飯だ。無理せず、食べられるだけでいいからね」

宗形の明るい声は、慶人に返事をさせないためのものだ。その気遣いに甘えさせてもらう。

「総一郎さんの手料理、嬉しいですよ」

「採点はお手柔らかに頼むよ」

翌日、慶人が講義室に入るとすぐに春太がやってきた。

「慶人くん、昨日一コマ休んだって聞いたけど大丈夫？」

「おはよ。うん、なんかちょっとお腹痛くて。けど家帰って寝たら何事もなくばっちり元気」

「よかった……」

「ありがとう」

礼を言って、春太の荷物が置かれた席の隣に座る。ルーズリーフとシャーペン、消ゴムを出したところで教授が入室し、ガヤガヤしていた室内がしんと静まり返った。

「この政策を行うことで地方は金融の――」

地域政策論。歴史を踏まえながらされる解説は面白い。しかし、講義が始まって十分ほどしたところで下腹部がツキンと鋭く痛み始めた。

「っ……」

どうして。下痢でも便秘でもないのに。刺すような鋭い痛みが続いている。

「……慶人くん？ どうしたの、大丈夫？」

無意識に腹を抱えたからか、春太が慶人の顔を覗き込んだ。

「平気。ありがとう」

小声で返し、放り投げていたシャーペンを握り直す。しかし下腹部の痛みは治まらない。

（痛い……）

いったいどうして痛むのだろう。やはり病院に行った方がいいだろうか。

しかし、下痢をしたときに痛む場所とは少し違っているような気がしていた。

（腸っていうより……膀胱？）

お尻側というより、体の前側、へその下の内部

辺りが痛んでいるような感覚だった。ペニスの奥……より少し上だろうか。筋肉の痙攣などでないのなら、思い当たる臓器は膀胱くらいだ。

（でも最近は尿道いじってないし……）

トイレが近くなるような膀胱炎の症状もない。

（やっぱり病院に行ってみよう……）

宗形に言えば心配をかけるが、原因がわかった方が安心するだろう。医師に何でもないと言われれば、それはそれで安心材料にはなる。

幸い、昨日や一昨日のような、驚くような強さの痛みではない。それに今日は金曜日。明日も明後日も大学は休みだ。

左手で痛む辺りをさすりながら、右手でシャーペンを動かす。

「このなかで三重県出身の人はいますかー？」

教授の問いかけに、前に座っていた人が手をあげた。いったい何の話をしていたのか、聞き逃していたのでわからない。

「じゃあ、忍びの血が混じっているかもしれないね」

教授が笑みを深める。どうやら政策の話からは少々脱線していたようだ。

「つまり藤堂高虎は――」

今はメモをとらなくてもいいか。そう思ったとき、鞆の中の携帯が震えた。教授からは見えないよう、隠しながらメールを開く。

【体調がよくないうだね。地域政策論が終わる頃に迎えに行く。病院は予約してあるから】

（総一郎さん……）

きつと春太の声を聞き取ってスケジュールを調整してくれたのだ。申し訳ない気持ちでいっぱいになりながら返信を打つ。

【ちよっとお腹が痛くて。でも激しい痛みじゃないので、自分で病院に行きます】

【だめだよ。もうそちらに向かつてる】

それなら、これ以上メールをしてもしかたない。運転の邪魔になってしまいそうなので、「すみません」と一言送るだけにする。

携帯をしまつて正面を見ると、ホワイトボードには専門用語が並んでいた。いつの間にか話は戻っていたらしい。聞き逃してしまった。

ため息をつき、今度はズキンズキンと痛み始めた下腹部を撫でる。

（なんなんだろう……）

変な病気でないといいけれど。あと、尿道プレイが原因のものでないといい。

（てか、病院で膀胱が痛む心当たりはありますかって訊かれたら――え、っていうか、病院で貞操帯見られちゃうんじゃ……？）

それはまずい。絶対にまずい。嫌だ。無理すぎる。きつと医師は貞操帯を見た瞬間に一から百までのことを察して、この痛みの原因がプレイにあ

ると決めつけるだろう。

(ど、どうしよう……)

教授の声なんて少しも耳に入らないまま、講義の時間が終わった。

「慶人くん、顔色が悪いよ」

教授が退室した瞬間、春太が慶人の背中に触れた。

「保健室行こう？ もし帰るにしても、先に少し横になった方がいいよ」

「ありがと。でも大丈夫だから」

顔色が悪いのは、きつと貞操帯を見られる不安からだ。今はもう、痛みよりもそちらの方ばかり気になっている。

「でも……」

「本当に大丈夫。でも念のため、この後病院に行くてくるね」

重ねて礼を言って、乱雑に荷物を鞆に入れて席を立つ。

「どこの病院？ 付き添うよ」

「ううん。さつき連絡があって、人が迎えに来てくれるから。ありがと」

「よかった。じゃあ外までついてくよ」

荷物を持ってくれた春太の横で、今度はシクシクと痛みを変えた腹をさすりながら外に向かう。

「もう来てるの？」

「たぶん、着いてると思うんだけど……」

門を出ると、すぐ目の前に宗形の車が止まっていた。見るからに高級車。隣で春太が息を呑んだのがわかる。

「慶人くん！」

車から宗形が降りてきた。目の前に立つと、すぐに慶人の肩を支えるように触れる。

「大丈夫か」

「すみません」

「いや——春太くんだね。いつも慶人くんから聞けるよ。送ってくれてありがとう。荷物も」

「いえ！　あの、昨日もお腹が痛かったみたいで……」

「うん。このまま病院につれて行くから。本当にありがとう」

「じゃあ、お大事に……何かあったらいつでも連絡してね」

春太は宗形に慶人の荷物を渡すと、この後の講義で被っているものは代返するとまで言ってくれた。慶人が礼を言くと、宗形に一礼してからキャンパス内に戻っていく。

「さあ、慶人くん。ゆっくりでかまわないよ」

「すみません……」

「いいんだ。病院はすぐだから」

「あの……それなんですけど」

開けてくれた助手席に乗り込みながら宗形の腕を握る。

「その、貞操帯が……」

「ああ、それなら大丈夫。以前行った大内クリニックス、覚えてるかな？ マイクとGPSをつけてもらったところ」

「あ……はい、あそこですか」

それなら安心だった。貞操帯も、恥ずかしいけれどそのときに見られている。

宗形は笑顔で頷くと助手席のドアを閉め、足早に運転席に戻った。シートベルトを締めながら続ける。

「性器の改造も請け負ってくれるような病院だからね。今ごろ、貞操帯を外さなくてもいい検査方法を考えてくれているはずだ」宗形がアクセルを踏み、言葉を切った。「だが、そんなことを気にしている場合じゃないだろう？」

「でも……」

「何より痛みの原因をはっきりさせないと」

「……ごめんなさい」

注意されて、二日も連続で早退させてしまったことを今さらながら反省する。迷惑をかけているのに、貞操帯を見られたくないという理由で病院に行くことを拒否したら、宗形からしたら身勝手ではないだろう。

「怒ってなんてないよ。謝ることはない。私だってその病院がなければ思案するところだ」

まだ腹の痛みはひいていなかった。温めるよう

に腹をさする。

「ほんと？」

「ああ。慶人くんを辱しめたいわけじゃないからね」

赤信号で宗形がジャケットを脱いだ。それを慶人の体に掛けてくれる。

「シートを倒した方が楽ならそうして。眠ければ眠ってしまってもかまわないよ」

「ん……ありがと」

気遣いに甘えて背もたれを倒す。シートそのものが温かくなるので、宗形に会えた安心感もあつて一気に眠気がやってきた。

（変なの……）

昨日もたくさん眠ったのに。どうしてこんなに眠くなってしまうのだろう。

（ほんと……変な病気じゃないといいな……）

宗形のジャケットの匂いをかぐように潜りながら目を閉じる。すうっと引き込まれるように眠りの世界に落ちた。

しかし次の瞬間、一気に意識が覚醒した。

「なにっ？」

「どうした？」

感じたペニスへの違和感。いや、ペニスへの違和感ではなく、貞操帯への違和感だった。

「慶人くん？」

「あ……え……」

腹を締め付けないようにと選んだ緩めのズボン。その下のボクサーパンツの中で、貞操帯がずれている。

「慶人くん、どうした」

車はまだ動いていた。しかし宗形が強引に道の端に寄せて車を止める。

「どうした、」

「総一郎さん……」

宗形は必死の形相で慶人を見ていた。けれど頬に触れる手は優しい。

「怖い夢を見たかな」

「ちが……貞操帯、が……」

慶人がそう言うと、宗形の表情が和らいだ。

「貞操帯？ それは見られても大丈夫だよ」

どうやらまだ医者に見られることに不安を抱いていると思われるらしい。きっとそんな夢を見たと思ったのだろう。

「違う……」

「うん？」

「あの、手……」

自分では怖くてたしかめられそうになかった。窓の外には通行人がいるので、宗形の手をジャケットの中に引きずり込む。

「て、貞操帯……とれた……」

「え？」

宗形の手が、慶人の股間をまさぐった。しかし

ズボン越しではわからなかったのか、そっと下着のなかに入ってくる。

「そ、総一郎さん……」

自分の体に何が起きたのかわからず怖かった。

「……これは……」

「総一郎さんっ……！」

「とにかく病院に急ごう」

ズボンの中がどうなっていたのか、宗形は言葉にはしなかった。ただ慌てて車を車道に戻し、アクセルを踏み込む。

「総一郎さん……僕、僕……」

「大丈夫だ。とにかく病院で診てもらおう。痛みは？」

「いえ……その、お腹はまだ痛いですけど……」

ペニスは痛くない。というより、痛んだかもしれないはずのペニスはおそらく消えていた。

突然の変化

「どうということかわかるか」

「……こういうケースは初めてです」

院長である大内医師は、慶人の腹にエコーのプローブをあてながら首を捻った。

隣に立ってモニター画面を見つめる宗形の手には、本当だったら一生外れないはずの慶人の貞操帯が握られている。

「ペニスが……ありましたよね」

「あったな」

覚えているだろう、という宗形の言葉に、大内が頷く。けれどすぐに首を傾げた。

「でも、消えている……。そして今は子宮があります」

「なぜ」

「さあ……」

大内も困惑を隠せないようだった。モニターから慶人へと視線を移す。

「生まれたとき、体に異常があると言われたことは？」

「ないと思います……少なくとも聞いたことはありません」

「ふむ……宗形社長、慶人くんの体に異変を感じたことは？」

「ない。一昨日から下腹部に痛みはあったようだが、性別を左右するような違和感は今まで一度も感じたことがない」

「そうですか……まれに男女の生殖器をもって生まれてくる人はいるんですが、それにしたってペニスが突然消えるというのはありえないですね……」

それはそうだろう。しかも、実際にはペニスだけでなく陰囊も消えている。つるりとしたそこには傷跡ひとつない。

「膣から子宮を確認したいんですが……」

「え……？」

それはどういふことなのだろう。

慶人が検査方法さえわからずにいると、大内が宗形を見上げた。

「なるべく早く、しっかりと検査をしておいた方がいいと思います。でももし怖ければ気持ち落ち着いてからでも」

「慶人くん。どうしようか」

「あの、子宮を確認するって……」

疑問に答えたのは大内だった。

「エコーの機械を膣から入れるんだよ」

「ひっ……」

「まあ……まだ膣があるかもわからないけど」

「え……？」

「もしかしたら、これまでも子宮は存在したのか

もしれない。でも臆がないからそのことに気付かずここまでできた、とか」

そんなこと、あるのだろうか。医学的なことがまったくわからないせいで、余計に不安がつのっていく。

「少し二人にしてもらってもいいだろうか」

「わかりました」

宗形に領いた大内が部屋を出ていき、診察室は静かになった。

「慶人くん」

「……総一郎さん……」

「驚いたね」

「はい……」

「でも、大丈夫だ。私は慶人くんの性別や体がどんな状態であろうと一緒にいる」

「……はい……」

でも、ペニスを失ってしまった。これからいつたいていどうなってしまうのだろうか。

「まずは、体の状態を確認してもらおう？」

「……でも……」

怖い。きっとこれ以上に怖いことなどないだろうと思うくらいすでに怖い思いをしているのに、もし想像もしていなかったようなさらなる何かを突きつけられたら――。

「一番は、慶人くんの健康だよ」

「……はい」

「大内先生に見せる前に、私が見てもかまわないかな」

「あ……」

宗形が見ようとしているのは、ペニスがあつた場所ではない。もつと下の、足の間だ。女性に興味のない慶人でも、女性器がどこにあるかくらいはなんとなく知っている。

「まずは見るだけだ。まあ、他人が触れる前に私が触れたいが」

「……はい」

どうせ、診察からは逃げられない。今日はこのまま帰ることができたとしても、結局その後に自分の体が理解できず悩み、落ち着かなくなる。それなら今確認してもらってしまった方がいい。

「足を開くよ」

ベッドの足元側に宗形が移動した。腰骨辺りまでずり下げた状態のズボンと下着を足から引き抜かれ、立てた膝をゆつくりと開かれる。

(っ……)

宗形はなにも言わなかった。それが恐怖心をあおる。

「そう……いちろうさん……？」

「……うん。女性器があるようだ」

「っ……なんでっ……」

「いったいどうしたことなんだろうな……私にもわからない。慶人くんのはたしかにつるりと

「していて、敏感な会陰があったはずなんだが」

「やつ……」

「少し触れてみても？」

「あ……こわ……」

「痛くはしないよ」

「頷くことも、首を振ることもできずにぎゅっと目を閉じる。」

「あ……」

「わかるかな。小陰唇だ」

「しょう……？」

「聞いたことのない言葉だった。」

「うん。少し開くよ」

「あ……」

「目を開ける。宗形が足の間に顔を埋めていた。なんて体勢だろう。」

「硬いな」

「え……？」

「硬くてあまり開かない。だが……うん、膣も尿道もある」

「あ……」

「クリトリスもあるし、どうやら本当に女性器が出現……というのかな。現れたようだ」

「なんで……やだっ……！」

「こんなことってありえない。信じられない。」

「慶人くん」

「宗形が屈んでいた身を起こした。下半身にタオ

ルを掛けられ、筋肉質な腕に抱きしめられる。

「やだっ、なんでっ……なんでえ……」

涙がぼろぼろと落ちた。だって、これまでずっと男だった。貞操帯の中に、ペニスはちゃんとあったのに。

「僕っ、なんでっ、やだっ、こわっ……」

「うん……うん」

宗形にしがみつき、子どものように声を上げて泣いた。

けれどペニスが戻ってくることも、女性器が消えることもなかった。

「シャワーは……今日はやめておこうか」

遠慮がちな宗形の声。無視をしたいわけじゃないのに、気持ちが定まらずに返事をするのができない。

促されるままベッドに入り、丸くなる。けれど腹を守るようなその姿勢が嫌で、体を起こして膝を抱えた。

「慶くん……」

到底現実を受け入れられそうになかった。だって、ありえない。

結局宗形によって膣が存在することがわかった後、慶人は泣き続けたせいで眠ってしまった。起きたときには車の中で、「落ち着いてからまた行こ

う」と宗形に言われただけだった。だから、大内の勧めめる「ちゃんとした検査」はまだできていなかった。

「飲み物を用意するよ。何がいいかな。温かいものにしようか」

「いえ……」

「じゃあ、炭酸で口の中をさっぱりさせようか」
何も飲みたくなかった。飲み物だけじゃなく、何も口に入れたくない。というより、何もしたくなかった。

「……おいで」

宗形が隣に座った。ベッドが沈み、体が勝手にそちらに傾く。宗形の腕に抱き寄せられたこともあって、体重を預ける。

「痛みはどうかかな」

黙ったまま首を振る。痛みはもう、なかった。それが体の変化の終わりを告げているようでつかった。

「そうか……」

宗形も口を閉ざした。

ほとんど返事をしない慶人のせいだとわかりながら、「かける言葉が見つからないのか」なんて八つ当たりのようないらだちを覚える。

「慶人くん」

宗形の右手が慶人の左頬を包んだ。

今度はそれに、「同情？」といらだつ。

返事もせず、視線も合わせずにいると、しかし宗形は半ば強引に慶人の顔の向きを変えさせた。

真剣な宗形の目と視線が交わるが、すぐに逸らす。そんな自分が子どもっぽくて、余計にいららする。けれどどうしたらいいかわからない。

「……体は冷やさない方がいい。湯たんぽを用意してくるよ」

制御できない感情がたかぶり、目に涙がたまった。

「っふ……」

「慶人くん」

やっぱり、一緒にいたくないのだ。だから湯たんぽなんて言って離れようとしている。

わかってはいる。こんな態度の人間と一緒にいたい人なんていないだろう。誰だって距離をおきたくなる。けれど自分の感情がコントロールできない。収まらないいらだちも苦しい。

「慶人くん……」

持て余されている。そりゃあそうだ。でも自分でもどうにもできないのだ。

「行って」

「え？」

「行ってもいいです。でも、湯たんぽもいらない」

仕事にも戻っていい。けれどもし本当に宗形が仕事に戻ってしまったら、見捨てるのかと泣くだろう。一緒にいてほしいのに、放っておいてほし

い。黙られるといらいらすするのに、何を言われてもカッとなる。むしろくしゃが止まらない。

「湯たんぽがいららないなら、一緒に寝よう」

どうして怒らないのだろう。どうしてこの態度の悪さを叱らないのだろう。やはり、こんな体になってしまったからか。だから怒ってはかわいそうだと思っているのか。

「……もう、やだっ……！」

宗形は優しい。優しくしてくれている。けれどそれがまたよそよそしく感じられる。

「うん、そうだね」

「っ！」

僕の気持ちなんてわからないくせに、と思った。わかるわけがないと、それでも寄り添ってくれていると頭ではわかっているのに。

「なにもできなくて、ごめんね」

謝られて、さらにいらだちがつのった。けれどきつく抱きしめられ、「ごめん……」と苦しうに耳元で何度も何度も繰り返されると、自然とささくれだった心が丸くなっていく。

「……ごめんなさい」

「慶くんが謝ることはなにもないよ」

「僕……なんかすっごくいらいらして……」

「それはホルモンバランスが崩れたからだよ」

「え……？」

「感情の起伏は慶くんのせいじゃない。慶くん

んも自分で苦しいって思ってたでしょう」

「それは……」

「いらだちは溜め込んではいけないよ。私は慶人くんにはつ当たりされたくらいで嫌いになつたりしないから」

「ほんと……？」

どちらの意味でもあった。いらだちがしかたないことなのか、そして嫌わないでいてくれるのか。しかし宗形は後者だけを受け取ったようだった。

「もちろん。親しいからこそ感情を出せるんだよ。気持ちを封じ込められたら悲しいな」

「総一郎さん……」

大人だ。心が広くて、余裕がある。自分も宗形のようにになりたいのに。

「苦しいね」

「ん……」

「けれど大丈夫。自然と落ち着いてくるよ」

「うん……」

「しばらく大学は休もうか」

「え……」

「休学して、家にいた方がいい」

「友達にあたっちゃうから？」

「違うよ。おそらく、慶人くんの体もまだ今回の変化に対応できていないんだ。だからこれからもっと、更年期のような症状が出てくるかもしれない」

「更年期……」

「あれは年齢を重ねることでホルモン量が変わって起きることだったはずだよ」

「……僕、ずっとこのままなのかな……」

「それは……だろう。でも突然変わったんだから、突然戻るってこともあるんじゃないかな」

「でももしずっとこのままだったら？」

「私の気持ちは変わらないよ」

「でも……」

「私の気持ちが変わらないというだけではダメかな」

「だめってわけじゃ……」

答えたとき、尿意を感じた。そのことに焦る。

「慶人くん？」

排泄は必要なことだ。けれどソコをどうしても意識してしまう。

「どうした？」

「あ……あの、トイレ……」

「ああ、一緒に行こう」

行くしかない。

宗形に手をひかれ、一緒にトイレに入る。それでもまだ気持ちが定まらない慶人のズボンと下着を宗形は下ろし、肩を抱いて便座に座らせた。

「すべて私がするから、慶人くんは排泄するだけでいい」

「総一郎さん……」

ありがたかった。だってそこを自分で処理するなんて、できそうにない。

「何も心配しなくていいからね」

背中をさすられていいるうちに、尿意が強まった。これ以上我慢して膀胱炎にでもなれば余計につらい。

けれど、このまま出してもいいのだろうか。

「あの、どうやってすればいいんですか」

「うん？」宗形が首をひねった。

「その、何もしなくていいんですか」

「――ああ、そういうことか。おちんちんがあつたときのように、押し込んで尿道口を下に向ける必要はないよ」

そうなのか。けれどなんとなく落ち着かず、横に立った宗形の腹に顔をうずめて下腹部に力を入れる。

（あっ……）

男女で尿道の長さが違うことは知っていたが、あまりにもすぐに尿が出たので驚く。しかもなぜか、膝や太もの前側に温かいものがかかっていた。

「……え？」

宗形の腹から顔を離すと、便器に落ちるはずの尿は便座を飛び越し、床をびしょびしょに濡らしていた。慌てて下腹部に力を入れて排尿を止めようとすけれど、体の感覚が違うせいかうまくい

かない。

「あ、あ……」

「慶人くん、大丈夫だ。気にしなくていい」

「や、ごめっ……」

どうして。なんで。

「慶人くん、大丈夫だよ。大丈夫」

「や、なんでっ、止まらなっ、ごめんなさっ……!」

「大丈夫だ」

「やあっ……!」

つらい。すべてがづらい。なんでこんな目に遭わないといけないのだろう。

「慶人くん、少し前屈みになってごらん。尿道口の向きが違うんだ」

「え……」

「足を閉じて、前傾になってごらん。そうするとこぼさない」

言われたとおり、足を動かす。濡れた便座が不快だった。けれどこれ以上汚れを広めるわけにはいかないし、何より体が戻るまで――もしかしたら今後一生、この体で排泄をしなければならいかもしれない。

「そう、上手。ほら、こぼれないだろう?」

「ん……」

宗形は、女性の排泄のしかたまで知っているのか。でもそれなら、最初から教えてくれたらよかったのに。

尿が便器に当たる音。恥ずかしいのに、今はそれが頼りだった。

尿が止まり、ぽたぽたと雫を垂らす。

「上手にできたね。いいこだ」

宗形が、汚れることもかまわず慶人の太ももを開いた。畳んだトイレットペーパーを持った手を足の間に差し込み、ぽんぽんと優しく陰部を拭いてくれる。

「ごめんなさい」

「どうして謝る？ 私がしたいんだよ」

宗形がほほ笑み、水を流した。

「一緒にいられるときは私がすべてお世話をするよ。だが――」

言葉を切った宗形を見上げる。どこか苦しそうな、悔しそうな顔をしていた。

「念のため、教えておくね。陰部を拭くときは、前から後ろに向かって拭くんだよ」

「前から……」

「お尻の菌が尿道につかないように、ということだ」

「ああ……」

そういうことか。これからは、そんなことを意識しなければならないのか。

なんだか、現実ではないような気分だった。夢の中の世界に紛れ込んだみたい。

「まあ、きつとすぐに治るよ。それまで――それ

からもしたいが、トイレも風呂も着替えもすべて私がするから大丈夫だ」

宗形が、軽々と慶人を抱き上げた。

「あつ、総一郎さん、おしっこが……」

「うん、痒くなっちゃう前にきれいにしよう」

言いたいことはそこではないのに。しかし宗形は自身が汚れることも、廊下に汚れが滴ることも気にする様子はなく、ただただ慶人の身だけを案じてくれた。

浴室の、バスマットの上にそつと下ろされる。

「少し冷えてしまったね。湯に浸かってリラクセスしよう」

「あの、でも体を流したらトイレの掃除を――」
湯を溜めるボタンが押された。ごおっと大量のお湯が流れ出る音を聞きながら、裸にされる。

「それも私がするよ」

「やです……」

子どものように汚したトイレの掃除などさせられない。しかし宗形はシャワーの温度をたしかめると、慶人の肩を流した。

「私がしたいんだ。慶人くんのトイレの世話ができるなんて恋人の特権だろう？」

「総一郎さん……」

「それに、私のせいだしね」

「え？」

「怒らないで聞いてほしいんだが、わざと言わな

かった」

「え？ どういうことですか」

「あの体勢ではおしっこがこぼれてしまうことはわかっていた。でも私にしがみついて排尿しようとする姿がかわいくて、どうしても言えなかった」
「うそ……」

「本当だ。実を言うと、トイレに失敗する姿も見なかった」

さすがにそれは嘘だろう――嘘であつてほしかった。しかし宗形は、普段慶人の許しを請おうとするときと同じく、慶人の肩に自身の額をこすりつけた。

「ついでに言うと、できればまだトイレのしかたを教えたくはなかった」

「……どうしてですか」

「決まってるだろう。失敗してしまう姿がかわいからだよ。それにトイレを使えなければ、ずっと私がお世話をできる」

「……本気で言ってます？」

「嫌われそうなら嘘だということにしなければ」

「嫌うってことはないですけど……どこまで気遣いどこまで本音かわからないです」

「すべて本音だよ。気遣うなら最初からトイレのしかたを教えてる」

なんと言葉を返したらいいかわからなかった。慶人が返答に困っている間に、宗形は泡のついた

手で慶人の足を洗い終える。

「怖ければ目を閉じていて」

「……ん」

浴槽に寄り掛かり、足を開く。目を閉じていると、柔らかな泡が陰部に触れた。

「せっけんがしみたり、指が痛かったら言ってね」

「はい……」

宗形の指がそつと陰部を撫でる。

「ここがクリトリスだよ」

「クリトリス……」

宗形の指先がそれに触れた。

「気持ちよくなるためだけにあるらしい」

言いながら、宗形はさらにその先に指をやった。

「おしっこはクリトリスの下から出る。この辺りだ」

「あつ……」

「それからその下に膣。中を洗う必要はない」

「そうなんですか……？」

「自浄作用があるからね。慶人くんだって、セックス以外の理由でお尻の中は洗わないだろう？」

約16万字の長編です。

男体妊娠が苦手な方にもお読みいただけるよう、分岐で2パターンのエンディングをご用意しました。

懐妊ストーリーは続編を別途執筆したいと思っています。

どうぞよろしくお願いいたします。

新作玩具体験会カントボーイパロー

©gooneone (ごーわんわん)

2024/ 2/ 28

メール: gooneonegooneone@gmail.com

pixiv: 19591291

Twitter: @gooneone11

本書の無断複写・転載・複製を禁じます。

※この作品はフィクションです。

実在する人物、団体等とは一切関係ありません。